



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	モンゴル語の副動詞語尾 -talの後に現れる接尾辞 -xに関する覚え書き
Author(s)	梅谷, 博之
Citation	北方言語研究, 7, 69-81
Issue Date	2017-02-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/64511
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_umetani.pdf



[資料・研究ノート]

モンゴル語の副動詞語尾 *-tal* の後に現れる接尾辞 *-x* に関する覚え書き

梅 谷 博 之
(東京大学)

1. 本稿の目的

モンゴル語ハルハ方言¹ (以下「モンゴル語」と記す) には, 名詞の格接尾辞や後置詞 *xürtel* 「～まで」の後に現れる接尾辞 *-x*²がある。この接尾辞によって形成された語は, 項の主要部となったり (いわゆる「名詞化」されたり), 連体修飾機能を果たしたりする。本稿³はこの接尾辞に関する先行研究をまとめ, その上で, これまで指摘されてこなかった現象を提示し従来の記述を再検討する必要があることを指摘する。

具体的には, 主に形態の面から, 次の4点を指摘する。(i) *-x* は, 名詞の格接尾辞や後置詞 *xürtel* の後だけではなく, 動詞の副動詞語尾 (連用修飾機能を有する動詞語形を形成する屈折接尾辞) の1つである *-tal*⁴の後にも付加される (*gar-tal-x*; 出る-CVB.TER-X)。(ii) *-tal* は, 「～まで」と「～すると, ～するや否や」という2つの意味を表しうるが, *-x* は前者の意味を表す *-tal* にのみ付きうる。(iii) 連体節の述語として用いられる動詞は「形動詞形」で現れることが従来指摘されてきたが, これに加え, *-tal* によって形成された副動詞形に *-x* が付いた形 (*V-tal-x*) も連体節の述語として用いることができる。(iv) 接尾辞 *-x* を “case-bound suffix” と呼ぶ研究 (Kullmann and Tserenpil 1996) や, *-x* を “marked nominative ending/case” と見なす研究 (Janhunen 2012) が存在する。しかし, (i) で指摘したように, *-x* が動詞の副動詞形に付く例が見つかった今, こうした名称・分析は再検討を迫られる可能性がある。

上記の4点を指摘した上で, 今後の課題を最後に提示する。

2. 文法概略

2.1 名詞の屈折

名詞は格により屈折する。各格形は, 語幹に格接尾辞が付くことで形成される。主格 (ゼロ接尾辞), 属格, 与位格, 対格, 奪格, 造格, 共同格, 方向格がある。モンゴル語の名詞を形容詞から明確に区分することは難しいとする考えがある (Janhunen 2012: 117 など)。

¹ モンゴル語ハルハ方言はモンゴル国の首都ウランバートルを中心に話されている。基本語順は SOV で膠着型の言語である。母音調和の現象が見られる。

² 第4節の (D) で今後の課題として述べたように, *-x* を接辞ではなく接語として分類する (すなわち, “=x” のように “=” を用いて表記する) 方がより適切である可能性もある。しかし本稿では, 多くの先行研究に従って暫定的に *-x* を接辞とみなしておく。

³ 本稿の議論は, 1979年ウランバートル生まれの女性モンゴル語話者 (1名) から得たデータに基づいている。2名の査読者からは貴重なご意見を頂戴した。また本稿は, JSPS 科学研究費補助金基盤研究 (C) 「モンゴル語の付属語の自立性に関する研究」 (研究代表者 梅谷博之, 課題番号 25370465) による研究成果の一部である。こうした方々, 機関からのご支援・ご協力に対して感謝申し上げる。

⁴ *-tal* は母音調和により *-tol*, *-tel*, *-töl* でも現れる。本稿では *-tal* で代表させて表記する。

2.2 動詞の屈折

モンゴル語の動詞内において、形態素は「動詞語基－ヴォイス接辞－アスペクト接辞－動詞語尾」の順序で現れる。例 (1) は動詞語基 **zar-**「売る」にヴォイス接辞（受身・逆使役を表す **-gd**），アスペクト接辞（完成 **-čix**），動詞語尾の一種である形動詞語尾（過去・完結 **-san/-son/-sen/-sön**）が付いた例である（例文中の太字強調は、問題となっている部分であることを示す）。

- (1) **Büx tasalbar=n' **zar-a-gd-čix-san**⁵.**
 全ての 切符.NOM=3POSS 売る-EP-PASS-COMPL-VN.PST
 「その（コンサート）全てのチケットは売れてしまった」

文中のある特定の動詞語形中にヴォイス接辞やアスペクト接辞が出現しないことはありうるが、屈折接尾辞である動詞語尾の出現は必須である。動詞語尾は終止語尾、副動詞語尾、形動詞語尾の3種類に分類される。（「終止語尾」という接尾辞が1つあるのではなく、終止語尾に分類される接尾辞は複数ある。副動詞語尾と形動詞語尾についても同様。）

以下、3種類の動詞語尾の機能を概説する（この3種類の語尾のうち、本稿の議論に主に関係するのは副動詞語尾と形動詞語尾である）。はじめに、3種類の動詞語尾によって形成される動詞語形が有する機能をまとめると表1のようになる。「形動詞」の「主節述語（文終止）」欄と「連用修飾」欄の記号「(+）」は、一部の形動詞語尾によって形成された形動詞形のみが当該の機能を有することを示す。

（表1）動詞語尾（動詞の屈折接尾辞）

機能 語尾	主節述語 （文終止）	連用修飾	名詞節述語	連体修飾
終止	+			
副動詞		+		
形動詞	(+)	(+)	+	+

終止語尾をともなった動詞語形（動詞の終止形）は主節の述語として用いられ、文を終止することができる。例 (2) の **baj-g-aaraj**（いる-EP-TV.OPT）を参照（例 (2) 中の **ir-tel** についてもすぐ後で言及するため太字強調を施してある）。

⁵ 本稿での例文表記は、原則としてキリル文字による正書法に従い、ローマ字転写したものを用いる：a=a, б=b, в=v [β], г=g, д=d, е=je/jö, ё=jo, ж=ž [dʒ~tʃ], з=z [dz~ts], и=i, й=j, к=k, л=l [ɮ], м=m, н=n, о=o [ɔ], ө=ö [ø], п=p, р=r, с=s, т=t, у=u [u], ү=ü [ʉ], ф=f, х=x, ц=c [tsʰ], ч=č [tʃʰ], ш=š [ʃ], ъ=”, ы=y [i:], ь=’, э=e, ю=ju/jü, я=ja。正書法の表記に依拠する理由は次のとおりである：モンゴル語の音韻解釈には、様々なものが提唱されている（過去に提唱された様々な音韻解釈については、Svantesson et al. 2005: 22–25 を参照）。筆者はこうした様々な音韻解釈のうちどれが適切であるかについて明確な結論に到っていない。本論文は音韻について議論するものではないので、この問題に立ち入ることを避けるために正書法に従って表記する。

- (2) Namajg⁶ **ir-tel** xülee-ž **baj-g-aaraj.**
 1SG.ACC 来る-CVB.TER 待つ-CVB.IPFV いる-EP-TV.OPT
 「私が来るまで待っていてください」

副動詞語尾をともなった動詞語形（副動詞形）は連用修飾の機能を果たす。本稿で主に扱う副動詞語尾 -tal 「～まで、～すると、～するや否や」が現れている例は (2) の **ir-tel**（来る-CVB.TER）である。

形動詞語尾をともなった動詞語形（形動詞形）は項の主要部となったり（＝名詞節⁷の述語として現れたり）、連体修飾の機能を果たして連体節を導いたりする。名詞節述語の例は (3) の **jav-sn-yg**（行く-VN.PST-ACC）を参照。連体修飾の例は (4) の **av-san**（取る-VN.PST）を参照（(4) 中の **alga bol-čix-son** についてもすぐ後で言及するため太字強調を施してある）。

- (3) Tüünijg Japon⁸ **jav-sn-yg** med-e-ž
 3SG.ACC 日本 行く-VN.PST-ACC 知る-EP-CVB.IPFV
baj-g-aa juu?
 いる-EP-VN.IPFV Q
 「彼が日本に行ったのを知ってる？」

- (4) Öčigdör minij nomyn sang-aas **av-san** nom
 昨日 1SG.GEN 図書館-ABL 取る-VN.PST 本.NOM
alga bol-čix-son.
 なくなる-COMPL-VN.PST
 「昨日私が図書館から借りた本がなくなってしまった」

一部の形動詞語尾によって形成される形動詞形は文を終止することもできる。すなわち、終止形と同じ役割も果たしうる。例 (4) の **alga bol-čix-son**（なくなる-COMPL-VN.PST）を参照。さらに、一部の形動詞語尾によって形成される形動詞形は、(既に挙げた名詞節述語、連体修飾、文終止のほか) 連用修飾の機能（すなわち副動詞形と同じ機能）をも果たす。

2.3 副動詞語尾 -tal

副動詞語尾 -tal が表しうる意味には、大きく分けて 2 つある（-tal が複数の意味を表しうることについては Kullmann and Tserenpil (1996: 167), Janhunen (2012: 167) など多くの先行研究で指摘されている）。その 1 つは、例 (2) で見た「～まで」という意味である。も

⁶ 従属節中の主語は、主格、属格、対格のいずれかで現れる。

⁷ 「名詞」とは語彙素群（品詞）に対して与えられる名称であり、統語的単位である節に対してこの名称を用いるのは適切でないと考えられる。しかし、どのような名称を代わりに用いるべきか筆者は検討中の段階であるため、この名称を暫定的に用いる。

⁸ 一部の移動動詞は、到達点や方向を表す名詞句（の主要部）に格接尾辞を付けることなく、語幹のまま支配する場合がある

う 1 つは、「～すると、～するや否や」という意味である。例 (5) を参照。

- (5) Ted namajg **xar-tal** genet
 3PL.NOM 1SG.ACC 見る-CVB.TER 突然
 alga bol-son.
 なくなる-VN.PST
 「彼らは私を見かけると突然いなくなった」

副動詞語尾 **-tal** が動詞 **xür-**「到る」に付いた **xürtel**（の用例のうち一部のものは、「～まで」という意味を表す「後置詞」として記述されることがある（Kullmann and Tserenpil 1996: 295, 橋本・谷 1993: 103 など）。以下は、Kullmann and Tserenpil (1996) に挙がっている、「後置詞」としての **xürtel** の例である。((6), (7) の英訳、英訳中の太字強調、英訳中のイタリックは Kullmann and Tserenpil のもの。例文中の括弧も Kullmann and Tserenpil が付したもので、省略可能であることを表す。例文番号、ローマ字転写、形態分析、例文中の太字強調、グロスとは本稿で付した。)

- (6) Čamajg ir-e-x (cag) **xürtel**
 2SG.ACC 来る-EP-VN.NP 時間 ～まで（到る-CVB.TER）
 bi end-ee baj-ja.
 1SG.NOM ここで-REFL いる-TV.VOL
 ‘Let me wait here **until** you come.’ (‘...until *the time* of your coming.’)
 (Kullmann and Tserenpil 1996: 295)

- (7) Bagš-ijn zaa-san (xuudas/ xičeel) **xürtel**
 先生-GEN 教える-VN.PST 頁 授業 ～まで（到る-CVB.TER）
 negbürčlen unš-aaraj.
 一つ一つ 読む-TV.OPT
 ‘Please read everything **up to** the *page/lesson* the teacher taught.’
 (Kullmann and Tserenpil 1996: 295)

なお、「動詞 **xür-** の副動詞形としての **xürtel**」と、「後置詞としての **xürtel**」の 2 つをどのようにに区別するかについての言及は、先行研究には特に見当たらない。

2.4 格接尾辞および後置詞 **xürtel** の後に現れる **-x**

先行研究では、**-x**⁹が格接尾辞および後置詞 **xürtel** の後に付加されうることを指摘してい

⁹ 接尾辞 **-x** の音価は [x] である。音価 [x] を持つ子音は、前寄りの母音から構成される語（女性語）においては、正書法では通常 **x** のみで表記される。一方、後ろ寄りの母音から構成される語（男性語）においては、音価 [x] を持つ子音は通常は後に軟音符をとまって表記される。(9) の **-x** のアポストロフィ

る¹⁰。

2.4.1 格接尾辞の後に現れる -x

多くの先行研究が指摘するように、-x は格接尾辞の後に現れる。-x は属格、与位格、方向格の接尾辞の後に現れうる¹¹。(8) は属格接尾辞の後に -x が付加された例である。属格接尾辞の後に -x が付いて形成された語は、項の主要部として（すなわち「名詞として」）用いられる。

- (8) **Bat-yn-x-yg** avčr-aaraj.
 PSN-GEN-X-ACC 持ってくる-TV.OPT
 「バトのものを持ってきてください」

(9) は与位格接尾辞の後に -x が付加された例である。(10) は、方向格接尾辞の後に -x が付加された例である。与位格接尾辞、あるいは方向格接尾辞の後に -x が付いて形成された語は、主として連体修飾の機能を果たす。

- (9) Tes **suman-d-a-x'**¹² cagdaagijn xeseg
 PLN 村-DAT-EP-X 警察署
 「テス村（にある）警察署」

は、この軟音符を転写したものである（ただし、属格接尾辞の後に現れる -x は男性語においても軟音符なしで表記される）。3 節で指摘するように、-x は副動詞語尾 -tal の後にも現れるが、その場合も -x は（男性語に付く場合も、女性語に付く場合も）[x] で発音される。しかし、インターネットでの検索結果を見る限り、男性語に現れる場合であっても、軟音符なしで表記される。そのため本稿でも、男性語に現れる場合でも軟音符なしで表記する（例 (15) の or-tol-x 「入る-CVB.TER-X」を参照）。

¹⁰ これらのほか -x は、（広義の）名詞のうち「時位詞」と呼ばれる下位範疇に属する語に付加されうる（例：deer-x “上-X”「上の」）。時位詞に -x が付く場合には、-x は（屈折接尾辞の後ではなく）時位詞に直接付く。一方、本稿で扱う -x は、屈折接尾辞である格接尾辞や副動詞語尾 -tal の後に現れるものである。本稿では、時位詞に -x が付加される例を、格接尾辞や副動詞語尾 -tal の後に現れる例とは（研究手続き上）別扱いし、扱わないことにする（但し Janhunen 2012 など、両者を同一のものと見なす研究も存在する）。

¹¹ 方向格接尾辞の後に -x が付くことを明確に述べている先行研究は、管見の限りない。しかし、Kullmann and Tserenpil (1996: 104) が挙げている例の中に、これに該当するものが含まれている。Kullmann and Tserenpil (1996: 104) に挙げられている例は次の通り：

- (i) **Zuslan ruu-xi zam muu baj-na.**
 避暑地 DIR-X 道.NOM 悪い ある-TV.NP
 ‘The road **to the summer camp** is bad.’ (‘The to-the-summer-camp-going road ...’)
 （英訳、英訳中の太字強調は Kullmann and Tserenpil のもの。例文番号、ローマ字転写、形態分析、例文中の太字強調、グロスとは本稿で付した。）

-x が属格接尾辞と与位格接尾辞に付加され、他の格接尾辞の後に現れない理由については、Janhunen (2012: 116) が推測を述べている。

¹² 通常、与位格接尾辞は語幹との間にスペースを入れずに直接続けて書かれる。しかし、与位格接尾辞の後に -x (-x') が現れる場合には、正書法では与位格接尾辞 -d 以降が語幹から離して書かれる (suman dax')。本稿では -d を語幹から離さずに続けて表記する。

るものが 1 例含まれている。例 (12) がこれに該当する¹⁶。

- (12) Xot **xürtel-x** xugacaan-d bid juu=č
 街 ～まで-X (到る-CVB.TER-X) 期間-DAT 1PL.NOM 何.NOM=FP
 jari-a-güj.
 話す-VN.IPFV-NEG
 ‘We hadn’t spoken until we got to the town.’ (‘We hadn’t spoken during **the until-the-town-reaching** time.’)
 (Kullmann and Tserenpil 1996: 105 ; 英訳, および英訳中の太字強調は Kullmann and Tserenpil のもの。例文番号, ローマ字転写, 形態分析, 例文中の太字強調, グロスは本稿で施した。)

Kullmann and Tserenpil (1996) は, 例 (12) を挙げてはいるものの, その中の **xürtelx** が「後置詞 **xürtel** に -x が付いたもの」であるのか, それとも「動詞 **xür-** の副動詞形としての **xürtel** に -x が付いたもの」であるのかを明言していない。また, 「後置詞 **xürtel**」と「動詞 **xür-** の副動詞形としての **xürtel**」の 2 つをどのように区別するかについても彼らは言及していないため, (12) の **xürtel** がどちらの例に該当するかを当方で推察することもできない。仮に (12) の **xürtel** が, 彼らが後置詞と見なすものに相当するのであれば, 彼らは橋本・谷 (1993) の指摘を支持する例を挙げていることになる。一方, (12) の **xürtel** が「動詞 **xür-** の副動詞形」と彼らが見なすものに相当するのであれば, 彼らは「-x が副動詞語尾 -tal の後にも付加されること」を示す例を挙げていることになる。

2.5 接尾辞 -x の名称

接尾辞 -x を扱っている先行研究の多くは, -x を単に「派生接尾辞」¹⁷と呼んでいる (Önörbajan 2004: 142, 塩谷 2007: 40–41)。その一方で, -x に対して一步踏み込んだ記述・分析を行ない, そうした記述・分析を反映させた名称を -x に与えている先行研究もある。その例として Kullmann and Tserenpil (1996) と Janhunen (2012) を挙げることができる。

Kullmann and Tserenpil (1996) は, 格接尾辞の後に付加される -x を “case bound suffixes” の一種であるとしている (同書 pp. 101–105)¹⁸。彼らによると, “case bound suffixes” とは次のようなものである ((13) 中の例文番号, および [] 内の補足は本稿で施したもの)。

¹⁶ Kullmann and Tserenpil (1996) は, -x が名詞の格接尾辞の後に付くことを指摘する文脈の中で例 (12) を挙げている。(12) 中の **xürtel-x** の -x は名詞の格接尾辞の後に付くものではないため, 彼らが例 (12) を当該部分で挙げるのは不適切であると思われる。

¹⁷ 一般に, 派生接尾辞は屈折接尾辞より語根に近い位置に現れる。-x を派生接尾辞と認めると, -x はこうした傾向に反する特徴を持つことになる。なお, Kullmann and Tserenpil (1996: 101) のように, -x を派生接尾辞と屈折接尾辞のどちらでもないものとして分析する研究もある。またすぐ後で説明するように, Janhunen (2012) は -x を屈折接尾辞 (主格接尾辞) とみなしている。

¹⁸ Kullmann and Tserenpil (1996: 101–105) は “case bound suffixes” の下位区分として 4 種類を認めている。格接尾辞の後に現れる -x は, これら 4 つのうち 3 つに該当する。

- (13) [Case-bound] suffixes are not [...] cases, but suffixes which are added to a noun with a CS [= case suffix].

Kullmann and Tserenpil (1996: 101)

Kullmann and Tserenpil (1996) は、-x が持つ「格接尾辞の後に現れる」という特徴に特に着目して、-x に “case bound” という名称を与えたものと思われる。

次に、Janhunen (2012) を紹介する。まず、Janhunen (2012) の分析の前提となっていることを述べる。モンゴル語では、名詞語幹に 2 つの格接尾辞が付加される場合がある。例としては次の (14) のようなものがある。

- | | | | | |
|------|----|------------------|----|-----------|
| (14) | a. | Bat-yn-d | b. | ger-t-ees |
| | | PSN-GEN-DAT | | 家-DAT-ABL |
| | | 「バトのところに、バトのものに」 | | 「家から」 |

Janhunen (2012: 114–117) は、格接尾辞の後に現れる -x を、(14a) の与位格接尾辞や (14b) の奪格接尾辞と同様に、名詞語幹に付加された 2 つの格接尾辞の 2 番目のもの（すなわち二重格変化の際に現れる 2 番目の格接尾辞）と見なした。そして、種々の格の中でも「主格」接尾辞であると見ている。さらに、名詞語幹に直接付加される主格接尾辞（「通常の」主格接尾辞）がゼロ形態素 (“unmarked”) であるのに対して -x は形式的に “marked” であるので、-x を “marked nominative ending/case” と名付けた。

3. 副動詞語尾 -tal の後に現れる -x

2.4 節で述べたように、-x は（一部の）格接尾辞および後置詞 *xürtel* に付加されることが先行研究によって明らかになっている。後置詞 *xürtel* は形式上、副動詞語尾 -tal を内包している（ように見える）ことから、そもそも副動詞語尾 -tal の後に -x が付きうるかどうかが問題になる。次の 3.1 節ではそうした用例が存在することを指摘する（以下、副動詞語尾 -tal によって形成された副動詞形を “V-tal” と表記し、それにさらに -x が付いた形を “V-tal-x” と表記する）。

また、2.3 節で述べたように -tal は、「～まで」と「～すると、～するや否や」という 2 つの意味を表しうる。3.2 節では、「～まで」という意味を表す -tal の後に -x が付いた用例のみが観察されることを指摘する。

3.3 節では、V-tal-x が、動詞の支配する句を保持しうることを指摘する。そして、V-tal-x が連体節の述語として機能しうることを述べる。

3.4 節では、2.5 節で挙げた -x の名称 (“case bound suffix” および “marked nominative ending/case”) が、事実を完全には反映したものになっていないことを指摘する。

3.1 用例

筆者の得たデータには、*xür*-「到る」以外の動詞から形成された V-tal-x の用例も観察さ

れる。(15) ～ (18) に例を挙げる。

- (15) Mörön xot¹⁹ **or-tol-x** tavin kilomjetr zam
 PLN 市 入る-CVB.TER-X 50 キロメートル 道
 「ムルン市に入るまでの 50km の道」
- (16) Surguul'-d **or-tol-x** xugacaan-d-aa sajn beld-eerej.
 学校-DAT 入る-CVB.TER-X 期間-DAT-REFL 良い 準備する-TV.OPT
 「入学するまでの間に良く準備をし（ておき）なさい」
- (17) Emneleg-ees **gar-tal-x** xugacaan-d-aa emčilgeen-d-ee
 病院-ABL 出る-CVB.TER-X 期間-DAT-REFL 治療-DAT-REFL
 sajn xamragd-aaraj.
 良い 関わる-TV.OPT
 「退院するまでの期間中は治療に積極的に取り組んでください」
- (18) Tend-ees gar-č **ir-tel-x** ödr-üüd
 そこ-ABL 出る-CVB.IPFV 来る-CVB.TER-X 日-PL(.NOM)
 ünexeer xünd baj-laa.
 本当に 厳しい ある-TV.PST
 「そこから出てくるまでの日々は本当にきつかった」

なお、**-tal** 以外の副動詞語尾の後に **-x** が付く例は観察されていない²⁰。

3.2 **-tal** の表す意味と **-x** の付加可能性の関係

筆者が得ているデータを観察する限りでは、「～まで」という意味を表す **-tal** の後に **-x** が付いた例は観察されるが、(5) のような「～すると、～するや否や」という意味を表す **-tal** の後に **-x** が付いた例は見当たらない。

3.3 **V-tal-x** が有する形動詞的な機能

V-tal-x は、動詞が支配する句を保持することができる。3.1 節で挙げた例では、(16) の

¹⁹ 註 8 で述べたように、一部の移動動詞は到達点を表す名詞句（の主要部）に格接尾辞を付けることなく、語幹のままで支配する場合がある。(15) もその例である。

²⁰ **-tal** に **-x** が付加されうる理由は共時的には不明である。通時的には、次のように説明される可能性がある：Sanžeev (1963: 160–161) では **-tal** の歴史的起源に関する諸学説が紹介されている。そこでは、「位格」と呼ばれる格接尾辞を内包する形式から **-tal** が形成されたとする説が紹介されている。**-tal** の後に **-x** が現れうるのは、そのこと（位格接尾辞を内包する形式から **-tal** が形成されたこと）の反映であるとも考えられる（**-x** が格接尾辞の後に現れうることは 2.4.1 節を参照）。この仮説の妥当性の検証については、今後の課題としたい。

surguul'-d (学校-DAT) や (17) の emneleg-ees (病院-ABL) がこうした句に相当する。また V-tal-x は、保持された句とともに後続の名詞句を修飾し、連体節の述語として機能している。

ところで先行研究 (例えば Pürev-Očir 1997: 304–305) では、動詞が連体節の述語となる場合には、その動詞は形動詞形で現れることが指摘されている。こうした従来の記述に加えて、動詞が連体節を形成する際にとる形の 1 つとして V-tal-x を認めることができる²¹。

3.4 接尾辞 -x の名称・分析の見直しの必要性

2.5 節で述べたように、Kullmann and Tserenpil (1996) が -x を “case bound suffixes” の 1 つとして分類したのは、「-x が格接尾辞の後に現れること」に着目したからだと思われる。また Janhunen (2012) は、-x を名詞の二重格変化の際に現れる 2 番目の格接尾辞 (主格接尾辞) と見なし、-x に “marked nomintative ending/case” という名称を与えた。

しかし 3.1 節で例を挙げたように、-x は副動詞語尾 -tal (= 格接尾辞ではないもの) の後にも付加される。そのため、「-x が名詞の格接尾辞の後に現れること」を前提としている “case bound suffix” や “marked nomintative ending/case” という名称は -x の特徴の一部のみを表していることになり、再検討を要する可能性がある。

4. まとめと今後の課題

本稿では次のことを指摘した。接尾辞 -x は、名詞の格接尾辞や後置詞 xürtel の後だけではなく、動詞の副動詞語尾の 1 つである -tal の後にも付加される (3.1 節)。-tal は「～まで」という意味と「～すると、～するや否や」という意味の 2 つを表しうが、前者の意味を表す -tal に -x が付加された例のみが見つかった (3.2 節)。また V-tal-x は、動詞が支配する句を保持しうる。V-tal-x は、保持された句とともに後続の名詞句を修飾することができる。動詞が連体節の述語になる場合にはその動詞は形動詞形で現れることが従来指摘されてきたが、V-tal-x も連体節の述語として機能しうる (3.3 節)。さらに、先行研究で接尾辞 -x に対して与えられた “case bound suffix” や “marked nomintative ending/case” という名称は再検討を迫られる可能性がある (3.4 節)。

今後取り組むべき課題としては、例えば次の (A), (B), (C), (D) の 4 つが挙げられる。

(A) V-tal-x の用例はある程度見つけることができた。しかし、V-tal-x の形成が全ての V-tal から可能であるかどうか (-tal の後にさらに -x を付加することの生産性) については、調査が不十分である。手元のデータを見る限りでは V-tal-x 中の V は移動を表す動詞が多いが²²、種々の動詞について V-tal-x の形成が可能かどうかを調べる必要がある。また、V-tal-x により修飾を受ける名詞も時間や場所を表すものが多いようである。他の種類の名詞も

²¹ 査読者からもご指摘を頂戴したが、3.3 節に述べたことから直ちに V-tal-x を「形動詞形」として認めてよいことにはもちろんならない (V-tal-x を「形動詞形」と認める可能性が最初から排除されているわけではない)。この問題についてはさらなる調査・検討を要する。

²² 本稿に挙がっているデータを見る限りでは V-tal-x の V が移動動詞に限られていること、および V-tal-x により修飾を受ける名詞が時間や場所を表すものに限られていることを、2 名の査読者からご指摘いただいた。重要なご指摘に対して感謝申し上げる。

V-tal-x により修飾を受けることができるかどうかを調査する必要がある。

(B) -tal は「～まで」という意味と「～すると、～するや否や」という意味の 2 つを表しうるが、「～まで」という意味を表す -tal にのみ -x が付加されることを 3.2 節で述べた。その理由は不明である。その説明が可能かどうかを検討したい。

(C) “case bound suffix” や “marked nomintative ending/case” という -x の名称を再検討する必要があることを本稿では指摘した。しかし、具体的に -x をどのようなものとして分析し、どのような名称を与えるのが妥当であるかについて対案を提示できていない。この問題を解決するためにも、-x の特徴をさらに詳しく記述する必要がある。

(D) 上の (C) とも関連するが、モンゴル語には屈折接尾辞の後に出現する接尾辞が (-x も含めて) いくつか存在する。これに該当する接尾辞には、例えば Umetani (2011) で扱った -član 「～のように、～と同様」がある。-član は動詞の屈折接尾辞である形動詞語尾の後に付きうる。

(19)	Darg-yn	ünel-sen-člen	bi	bas	činij
	上司-GEN	評価する-VN.PST-like	1SG.NOM	また	2SG.GEN
	xij-sen	ažl-yg	ünel-ž	baj-na.	
	する-VN.PST	仕事-ACC	評価する-CVB.IPFV	いる-TV.NP	

「上司があなたを評価しているのと同様、私もまたあなたのした仕事を評価している」(Umetani 2011: 181, 例文番号とグロスを本稿の表記に合わせて変え、引用元では英語で付されている訳文を日本語に変更した。)

こうした「屈折接尾辞の後に出現する接尾辞」をどのように分類すべきか（屈折接尾辞と見るのかそれとも派生接尾辞と見るのか）という問題がある。また、名詞の屈折形だけではなく動詞の屈折形にも付きうる -x をどのように扱うか（接辞と見るのかそれとも接語とみるのか）という問題も生じる。これらの問題を解決するためには、-x やそれに類する接尾辞の記述を進めてモンゴル語の全体像を明らかにした上で再度 -x（やそれに類する接尾辞）をモンゴル語の中に位置づける作業が必要になる。これらの問題を解決する糸口を見出すべく、さらに研究を進めていきたい。

略号

-	affix boundary 接尾辞境界	COMPL	completive 完成
=	clitic boundary 接語境界	CVB	converb 副動詞語尾
1	first person 一人称	DAT	dative-locative 与位格
2	second person 二人称	DIR	directive 方向格
3	third person 三人称	EP	epenthesis 音添加
ABL	ablative 奪格	FP	focus particle 焦点を表す小辞
ACC	accusative 対格	GEN	genitive 属格
COL	collective 集合	IPFV	imperfective 未完結

NEG	negative 否定	PST	past 過去
NOM	nominative 主格	Q	question particle 疑問小辞
NP	non-past 非過去	REFL	reflexive possessive 再帰所属
OPT	optative 希求	SG	singular 単数
PASS	passive 受身	TER	terminative 限界
PL	plural 複数	TV	terminating verbal 終止語尾
PLN	place name 地名	VN	verbal nominal 形動詞語尾
POSS	possessive 人称所属	VOL	voluntative 意思
PSN	personal name 人名		

参照文献

- 橋本勝 (監修)・谷博之 (編) (1993)『モンゴル語文法・講読』モンゴル語研修テキスト (1).
東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Janhunen, Juha A. (2012) *Mongolian*. London Oriental and African language library 19.
Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Kullmann, Rita and D. Tserenpil (1996) *Mongolian grammar*. Hong Kong: Jensco.
- Önörbajan, C. (2004) *Orčin cagijn mongol xelnij ügzüj* [*Morphology in Modern Mongolian*].
Ulaanbaatar: Mongol Ulsyn Bolovsrolyn Ix Surguul', Mongol Sudlalyn Surguul'.
- Pürev-Očir, Bjambažav (1997) *Orčin cagijn mongol xelnij ögүүлberzүй: Mongol xelnij ögүүлberzүйн үндсэн асуудал, negžүүдийн бүтэц, тогтолцоо* [*Syntax of Modern Mongolian: Fundamental issues, and the structure and system of [sentence] units*].
Ulaanbaatar: “Süxbaatar” Kompani.
- Sanžeev, G. D. (1963) *Sravnitel'naja grammatika mongol'skix jazykov: Glagol*. Moskva: Nauka.
- 塩谷茂樹 (2007)『モンゴル語ハルハ方言における派生接尾辞の研究』箕面: 大阪外国語大学
研究推進室編集部門.
- Svantesson, Jan-Olof, Anna Tsendina, Anastasia Mukhanova Karlsson and Vivan Franzén (2005)
The phonology of Mongolian. New York: Oxford University Press.
- Umetani, Hiroyuki (2011) Characteristics of the derivational suffix *-član* in Khalkha Mongolian.
In: *Proceedings of the 10th Seoul International Altaistic Conference: Reexaminations of
objects and methods of research into Altaic languages and cultures*, 173–186. Seoul: The
Altaic Society of Korea. (Paper presented at the 10th Seoul International Altaistic
Conference. Sunchon National University, South Korea, 16 July 2011.)

Some Notes on the Mongolian Suffix *-x* that is Attached to the Converb Suffix *-tal*

Hiroyuki UMETANI
(University of Tokyo)

As demonstrated by extant studies, the Khalkha Mongolian suffix *-x* can be attached to some case suffixes or the postposition *xürtel* ‘up to, as far as,’ and the words formed with this suffix can be used as nominals or adnominals. This article aims to review the previous works on this suffix, and to demonstrate the following four points. (i) *-x* can also be attached to *-tal*, one of the converb suffixes (a group of verbal conjugational suffixes that are employed to form adjunct clauses) as well as to case suffixes and the postposition *xürtel*. (ii) Although *-tal* has two meanings, namely, “until” and “after, as soon as” (e.g., *gar-tal* can express “until someone goes out” and “after someone has gone out”), *-x* can only be attached to the *-tal* with the meaning “until.” (iii) It is pointed out in the literature that when a verb functions as the predicate of an adnominal clause, it must appear in a verbal-nominal form. In our observation, however, *V-tal-x* can also form adnominal clauses. (iv) Kullmann and Tserenpil (1996) classify *-x* as a “case-bound suffix,” and Janhunen (2012) names it “marked nominative ending/case.” However, given the fact provided in (i), (i.e., the fact that *-x* can also appear after the converb suffix *-tal*), these terms and analyses should be re-examined and revised.

(うめたに・ひろゆき humejp@yahoo.co.jp)